第三次造字法“形声(けいせい)”

昔は、第一次造字法である“象形”と、“指事”及び第二次の造字法である“会意”が主ですから、すべての言葉を表わすだけの漢字を作ることが出来ませんでした。

それで、同じ発音は勿論、似た発音の言葉は、仮借で間に合わせていたわけです。花も鼻も“はな”と書くようなもので、“数字の十”も“はり”を表わす漢字の“十”で間に合わせていたのです。

しかし、それでは、数字の十だか、針の十だか区別がつきません。そこで、考えられたのが“形声”です。“形”は“象形”の形で、指事をも含めた“従来の漢字”を指しています。“声”は音声のことです。

音声を表わす“十(しん)”だけでは、数だか、針だか解らないので、意字である“金”を加えて金属の針専用の字を作りました。この“針”のような造字法が“形声”です。形は意味、声は発音と考えたら解りやすいでしょう。

“工(こう)”という字は、物指し(定規(じょうぎ))の象形字で、①定規という意味の字です。②定規をうまく使う。③定規を使って作事に励む。④仕事を成しとげる、等の意味に使うばかりでなく、“コウ”という発音の別の言葉である⑤コウという川の名。⑥コウという色の名。⑦コウという肉体の部分の名、等の仮借としても使われていました。

しかし、川の名には“氵(さんずい)”を加えて“江”、色の名は“糸”を加えて“紅”(色は紺緑紫等糸で表わす)肉体では“月”(肉の変形で肉月と呼ぶ)を加えて“肛”とし、②では“巧”、③では攻という字にしました。

江･紅･肛は、扁(へん)が形、旁(つくり)が声の形声字ですが、巧･攻･功では、工が扁になっていて、会意で形声を兼ねています。

この形声により、漢字はどんな言葉でも表わすことが出来るようになり、どんどんとふえていきました。